鬼カゲさま

豊島与志雄

青空文庫

一

むかし、関東地方を治めてゐた殿様がありまして、江戸に住んでゐられました。その殿様が、病気にかかられて、いろいろ手当をなさいましたが、病気はおもくなるばかりで、いつ亡くなられるかわからないありさまとなりました。

家来たちはたいそう心配しました。ことに、江戸から遠いところにゐる家来たちは、殿様のごやうすがよくわからないので、ひどく心をいためました。

秩父のおくにゐました秩父の司も、たいへん心配しまして、ある日、三峰山の中に、三峰の法師をおとづれました。この三峰の法師といふのは、祈りのみちにくはしく、またいろいろな薬にもくはしいとの、評判のたかい人でした。

秩父の司は三峰の法師にたのみました。殿様のご病気がなほるやうに、お祈りをしていただきたいし、また、お薬をととのへていただきたいと、たのみました。

「七日の間お待ちください。」と三峰の法師はいひました。「七日かからなければ、私のちからではどうにもなりませぬ。」

「それでは、八日めには、かならずととのへていただけますね。」

「承知いたしました。」

その約束で、秩父の司はいくらか安心しました。けれど、七日の間が待ちきれないやうな思ひでした。江戸からのたよりでは、殿様はますますわるくなられるばかりです。

その七日のあひだ、三峰の法師は、朝は日の出る前二時間、夜は日が沈んでから二時間、いつしんにお祈りをして、守り札をこしらへました。それから昼間は、秩父の山や谷をあるきまはつて、りつぱな薬草をさがしあつめ、それを夜の間に乾かしました。

そして八日めに、守り札と、調合した薬とを、秩父の司のところへとどけました。

秩父の司の喜びは、たとへやうもありませんでした。

ところが、殿様のようだいはあぶないのです。ひと時も早く、その二品を江戸までとどけなければなりません。どうすれば、一番早くとどけられるでせうか。

秩父の司は、人人を呼び集めました。

その集まりの席で、私が江戸へまゐりませうと申し出たものがありました。

「馬をかけさして行きます。馬が倒れたらこの足でかけて行きます。命のあるかぎりとんで行き、殿様のおやかたへ、その品をかならずおとどけいたします。」

それは、秩父の速といふ若者でありました。馬術にすぐれ、ことに、足が早いので知られてゐました。

秩父の速ならば、みごとこの役目をはたすであらうと、秩父の司も思ひましたし、ほかの人人も思ひました。

さつそく、評議はまとまりました。

秩父の速がお使ひとして、貴い二品をあづかりました。ほかになほ四人の者がついて行くことになりました。

秩父の速がひき出した馬は、つやつやとした鹿毛のけなみもうつくしい、たくましいもので、鬼カゲと呼ばれてゐる名馬でした。ほかの四人の馬も、それぞれすぐれた馬ばかりでした。

そしてこの五人は、江戸へむかつて遠い道を、いつさんに馬をか

けさせました。

二

ひろびろとした武蔵野（むさしの）を、江戸の方へむかつて、五人のさむらひをのせた五頭の馬が、風のやうにかけて行きます。通りがかりの人人は、あきれたやうにそのあとを見おくりました。

まつ先にたつてゐるのは、秩父の速がのつてる鬼カゲです。少しおくれて、四頭の馬がつづきます。どの馬もみな、たいへん疲れてゐます。乗りてもつかれてゐます。それもむりはありません。遠い秩父のおくから、かけどほしにかけて来たのです。そしてなほ、馬も人も、力のつづくかぎり、かけつづけるつもりのやうです。

その力も、だんだんつきてきたやうです。おくれるものがでてきました。おくれては、また先のにおひつかうとしますが、それもよういではありません。入間川（いるまがは）のてまへで、たうとう、一頭の馬は倒れました。入間川をのりこして、なほ進むうち、つぎつぎに倒れるのがでてきました。そして大井をすぎるころには、まつ先の鬼カゲだけとなりました。

鬼カゲも、さすがに、体ぢゆう汗にまみれてゐます。息もけはしくなつてゐます。それでもなほかけつづけます。かなた、江戸の方向に目をむけながら、かけつづけます。乗つてゐる秩父の速も、汗にまみれながら、かなた、江戸の方向に目をすゑてゐます。その馬と人との、おなじ方向にむいてる目が、おなじ一つの決心を現はしてゐるやうです。馬と人と一つになつて、江戸までかけつづけるぞと、決心してゐるやうです。

やがて、大和田まで来ました。それでも鬼カゲは、休みませんでした。大和田を通りぬけると、大きな杉の木が、道ばたにそびえてゐました。そのそばを、うす暗いかげの中を、突つきりました。だが、突つきるとたん、その杉の根が少し高く出てゐるところへ、鬼カゲはつまづいて、ばつたり倒れました。

鬼カゲは倒れました。だが、横だふしにではありません。なほ主人を乗せるつもりか、四つ足をまげて、かがむやうに倒れたのです。倒れるといつしよに、はりつめてゐた力もつきて、頭をがつくり地面におとしました。

秩父の速も、力がつきかけてゐました。鬼カゲが倒れると、地面になげ出されて、気がとほくなりました……。

ふと、秩父の速はわれに返りました。杉の木によりかかつて立つてゐました。そばには、鬼カゲがつつ立つて、はるか江戸の方向を見つめてゐます。

秩父の速も、鬼カゲとおなじ方向に目をむけました。さうだ、死んでもなほ果さなければならない役目があるのです。秩父の速は元気をとりもどしました。鬼カゲの頸をなでながらいひました。

「さあ、もう一息のしんぼうだ。たのむぞ。」

秩父の速は鬼カゲにとび乗りました。鬼カゲはかけだします。秩父の速はもうむちゆうでした。息もつけないほどの早さで、武蔵野を突つきり、江戸につき、殿様のやかたへかけつけました。

殿様のやかたの前で、秩父の速は大声に呼ばはつて、門をはひり、背中にしよつてゐた箱をさし出したまま、そこにがつくりとかがみこんでしまひました。

箱の中には、三峰の法師がととのへてくれた二品がはひつてゐました。守り札は、殿様の枕もとにそなへるもので、薬はせんじて、

殿様にさしあげるものなのです。それからなほ、その二品について、秩父の司からのくはしい手紙がそへてありました。

三

秩父の速は、みごとにその役目を果しました。そして、貴い守り札と薬のおかげで、殿様のなやみも早くうすらぎ、まもなく全快されることとなりました。秩父の速は、てあついご褒美をいただきました。

ところが、ふしぎなことがありました。

秩父の速は、大和田からこちらも、鬼カゲにのつてかけて来たつもりでゐましたが、その鬼カゲが、どこにも見つかりませんでした。殿様のやかたの人たちにきいても、門番にきいても、秩父の速は馬に乗つて来たのではなく、ただ馬のやうに早くかけて来たのだと、いひました。

「馬のひづめの音がしたやうでもありますが、いやたしかに、馬の姿は見えませんでした。」

それでも、秩父の速はなほ、鬼カゲをさがしましたけれど、やはりどこにも見つかりませんでした。

そのうちに、秩父の司のところからいつしよに出かけて来て、途中で馬をうしなつた四人のものが、おくれて江戸へつきました。その人たちの話では、鬼カゲはたしかに、大和田のあたりに倒れてゐたさうだといふのです。

秩父の速には、どうもなつとくがいきませんでした。鬼カゲに乗つて江戸へ来たとばかりおぼえてゐるのです。

そののち、秩父の速はまた、秩父のおくへ帰ることになりました。それで、大和田を通る時に、よくしらべてみますと、あの鬼カゲはたしかに、大和田の町はづれの杉の木の根もとに倒れてゐて、そこの人たちのなさけで、近くに葬られたといふことがわかりました。

鬼カゲが葬られた場所には、そのしるしに、大きな石が一つ置いてありました。

秩父の速は、その石の前にひざまづいて、涙をながしました。

「鬼カゲ、おまへは死んでもなほ、だいじな役目を私といつしよに果さうとの一念から、私を江戸まで乗せて行つてくれたにちがひない。鬼カゲ、私は心からお礼をいひます。」

そして秩父の速は、この名馬の魂をなぐさめるため、馬頭観音の像を石にきざませて、鬼カゲが葬られた場所にまつりました。

――この馬頭観音は、鬼カゲさまといはれて、のちのちまで長く祭られました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第一六巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「先生の心・長彦と丸彦」新潮社
　　1942（昭和17）年12月
初出：「幼年倶楽部」講談社
　　1942（昭和17）年4月
※初出時の表題は「おにかげさま」です。
入力：菅野朋子
校正：門田裕志
2012年1月3日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鬼カゲさま

豊島与志雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/